

# 日本手話における「変化で属性を表す」メトニミー

松田 俊介

**【要旨】** 日本手話には「変化」を表す形式で「属性」を表すという方略が広く見られる。例えば、「背が伸びる」を表す形式で「背が高い」という意味も表すことができる。この方略は「変化」と「属性」の間に成立する近接性に基づいた換喩である。本稿は、この種の換喩が生じるのは日本手話が身体を媒体とするからであるということを示したうえで、この換喩は認知文法における「主体化」の事例として位置付けられることを明らかにする\*。

**【キーワード】** 日本手話, 認知言語学, 仮想変化表現, 換喩, 主体化

## 1 はじめに

手話とは身体動作を使ってメッセージを伝達する視覚言語である。そのうち、日本のろう者コミュニティで自然発生したものは日本手話と呼ばれる<sup>1</sup>。

日本手話には「変化」と「属性」の意味を一つの形式で表すという現象が広く観察される。例えば、次の (1) は「背が伸びる」という変化の意味と「背が高い」という属性の意味を表すことができる<sup>2</sup>。

---

\* 本稿を執筆するにあたり、二名の査読者、編集委員の方々、西村義樹先生、石塚政行氏、木下蒼一朗氏、田中太一氏から貴重なコメントをいただいた。また、インフォーマントの方々には数多くの事例を提供していただいた。心から感謝申し上げます。なお、本稿に残る不備はすべて筆者一人の責任に帰するものである。本稿は JSPS 科研費 21J21787 の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> 日本では、「オリンピックの開会式に手話通訳がついた」といったように、手話という言葉で日本手話を指すことがよくある。この用語法は、実際には日本手話という個別言語を指しているにもかかわらずそのことを意識させないものであるため、多くの人にとって「ろう者は皆「手話」という名前の一つの言語を使っている」という印象を与える。そこから「手話は世界共通である」と思われることも少なくないが、これは間違いである。このような間違いがあってはいけないので、本稿では「手話」は手話一般を指すものとしてのみ用いる。

<sup>2</sup> 本稿で使用する日本手話のデータは、①インターネット上の事例、②母語話者に聞き取り調査をして得たもの、からなる。それらすべてをインフォーマントに表現してもらい、撮影した (写真掲載許可取得済)。写真は左から右に見ること。

(1) 背が伸びる or 背が高い



これは多義現象と言えるため、日本手話研究者、ひいては意味論一般の研究者の目を惹くものと思われる。しかし、私の知る限り、この現象が言語学的な問題として提起されたことはこれまでにない<sup>3</sup>。そこで本稿は、日本手話の記述的・理論的研究の一環として、この現象を認知言語学——特に、認知言語学において最も包括的な理論の一つである Ronald Langacker の認知文法 (Cognitive Grammar)——の立場から分析する。本稿が認知文法の立場を採用する理由は以下の2点である。まず、言語の本質は意味を表現・伝達することにあると考える認知文法 (Langacker 1987: 12) に依拠すれば、この多義現象の本質に迫れると期待されること。そして、認知文法という理論が最初期から手話を潜在的考察対象としている (Langacker 1987: 61) にもかかわらず、この枠組みから本格的に日本手話を分析をした研究がほとんどないということ、である<sup>4</sup>。

## 2 認知文法の概説

具体的な分析に入る前に、本節では認知文法の概説を本稿に關係する範囲で行う<sup>5</sup>。なぜなら、議論の前提を共有していなければ、説明方式および考察対象の妥当性が判断できないと思われるからである。

<sup>3</sup> いくつかの辞書にはこの種の多義語が記載されていた (e.g. 『日本語—手話辞典』(全日本聾啞連盟出版局)、『すぐに使える手話パーフェクト辞典』(ナツメ社)、*A Concise Dictionary of New Zealand Sign Language* (Bridget Williams Books) が、語釈を挙げるにとどまり、分析を行っているものはなかった。なお、日本手話の辞書には次のような問題がある。すなわち、(イ) 辞書の中には母語話者の協力を得ずに作成されたものがあるために、母語話者たちが (日本手話の音韻規則から逸脱しているなどの理由で) 使用することに強い違和感を抱く表現が載ってしまっている、(ロ) 多くの場合、意味を一つだけ書いて済ませているため、読み手が多義に関する情報を得られない、(ハ) 見出しとなっている日本語の果たす役割——形式を表しているのか、意味を表しているのか、それらが結びついたもの (記号) を表しているのか——が辞書によって異なり、さらに同じ辞書の中でも役割が一貫していないといった問題である。(ロ)(ハ) の詳細については松田 (to appear) に譲るとして、ともかくこのような事情から、現存する日本手話の辞書が信用に値するデータを提供してくれるものなのか、私には甚だ疑問であるため、本稿は辞書からデータを採るようなことはせず、事例検討とインフォーマント調査を通して記述・分析を行う。

<sup>4</sup> アメリカ手話を認知文法の立場から分析した研究はいくつかある (e.g. Wilcox 2007)。

<sup>5</sup> 日本語で書かれた認知言語学 (認知文法) の解説については、野村 (2009)、酒井 (2017)、西村 (2018)、坪井 (2020) を参照。

## 2.1 統合的言語観

認知文法は、言語は一般的な認知能力 (e.g. 記憶・知覚・カテゴリー化) を基盤にして成立していると考えられる。したがって、様々な認知能力を説明原理として言語現象が分析されることになる。西村 (2018: 5) はこのような言語観を統合的言語観と呼び、「言語の知識は他の認知諸領域と密接不可分の関係にあり、前者の本質は後者との関連を考慮して初めて十分に解明されうる」という言語観であると特徴付けている。ここで言う認知能力のうち本稿に関係するものは、スキヤニング (scanning) および参照点能力 (reference point ability) である。

スキヤニングとは、対象の移動や形状などを辿る認知能力のことである。例えば、私たちは投げられたボールの軌道を目で追ったり、大きな建物の全体を見渡して輪郭を把握したりすることができる。この能力が様々な言語表現の成立基盤になっていると認知文法は考える。例えば (2) では、子供の移動がスキヤニングされたことで移動の経路が把握され、経路を表す語彙項目である *across* が使用されている。

(2) a. The child hurried across the busy street. (Langacker 1998: 77)

[その子供は混雑している通りを急いで渡った]

参照点能力とは、ある対象 A にまず注意を向け、それを介して A と密接な関係を持つ別の対象 B に注意を向ける認知能力のことである。例えば、私たちは道案内をするときに「あそこにコンビニが見えますよね。その横にバス停があります」などと説明する。このとき、私たちはコンビニにまず注意を向け、それを介してそれと密接な関係——空間的近接関係——を持つバス停に注意を向けていると言える。こうした参照点能力が関わる言語現象の一つに換喩 (metonymy) がある。換喩については次節で述べる。

## 2.2 日常言語における比喩の遍在性

認知文法は、比喩——通常はある対象 A を表す形式によって別の対象 B を表すこと——は技巧を凝らす際にのみ使われるような修辞法ではなく、言語というものはそもそも本質的に比喩性を帯びていると考えている。例えば、Langacker (1987: 1) は「言語データから比喩を完全に取り除いてしまうと、ほとんど何も残らないだろう」と述べ、言語学における比喩分析の重要性を強調する。比喩のうち本稿に関連するものは換喩 (metonymy) である。

換喩とは、ある対象 A を表す形式によって A と近接関係にある別の対象 B を表す比喩である (佐藤 1992 [1978])。ここで言う「近接関係」とは、A と B が同じ知識領域の中にあるということである (西村 2002)。例えば、(3)(a) の下線部が「ある種の器」を指

しているのに対して、(3)(b) の下線部は「その器を使って調理された料理」を指している。つまり、(b) では「ある種の器」を表す形式によって「その器を使って調理された料理」が表されているわけだが、このような指示対象のシフトが可能なのは「器」と「その器を使って調理された料理」が同じ知識領域——ある器を用いて、野菜や肉などを調理して食べるという知識——に存在するからである。

- (3) a. 鍋を落として壊した。  
b. 昨夜は鍋を食べた。

また、中英語の *bedes* (現代英語の *beads* にあたる) は「祈り」から「数珠玉」へと意味が変化した語であるが、この変化は「祈祷の際には祈りの回数を把握するために数珠玉を数える」という中世の習慣についての知識に基づくものである。この場合においても、「祈り」と「数珠玉」が同じ知識領域に属しているわけである。

換喩が成立する基盤には 2.1 節で述べた参照点能力がある。(3)(b) では器にまず注意を向け、それを介してその器と近接関係を持つ食べ物に注意を向けている<sup>6</sup>。

### 3 属性の換喩

本節では、日本手話の属性表現を日本語と比較する形で考察していく。次の (4)(a) では彼の身長の変化を表すために「伸びる」が用いられており、(4)(b) では彼の身長の恒常的な属性を表すために「高い」が用いられている。日本語では、変化と属性に異なる形式が充てられている。

- (4) a. 彼は背が伸びた。  
b. 彼は背が高い。

それに対して、日本手話は (4)(a) と (4)(b) の下線部を同じ形式 (5) で表す。日本手話は、日本語で形式的に区別される二つの意味を単一の形式で表すのである。

---

<sup>6</sup> ただし、現代においては「鍋」で「鍋料理」を表す用法は定着しているため、このような過程が発話のたびに生じているとは考えられないだろう。

(5) 背が伸びる or 背が高い (=1)



(5) の形式では「下方→上方」という手の位置変化が目に見える形で現れている。これが、「低い→高い」という実際の変化を表す (4)(a) に対応するのは自然に思える。面白いのは、日本手話が (4)(b) のような恒常的な属性に対しても、変化を表す際と同一の形式を用いる点である。ここに見られるのは変化から属性への形式の流用である。

「背が伸びる」という変化の最終局面は「背が高い」という属性である。言い換えれば、「背が伸びる」と「背が高い」は同一の知識領域に属している——人の背丈はある程度上方向に伸びると、平均を超えて背丈が高くなる——ということである。したがって、これは「変化」の形式でそれと近接関係にある「属性」を表す換喩であると言える。この種の換喩は、属性のうちでも、なんらかの基準 (e.g. 人の平均的な背丈の大きさ) に照らして初めて判断できる属性——相対的属性——に広く見られる<sup>7</sup>。以下に例を挙げる。

(6) 背が縮む or 背が低い



(7) 髪が長くなる or 髪が長い



(8) 髪が短くなる or 髪が短い

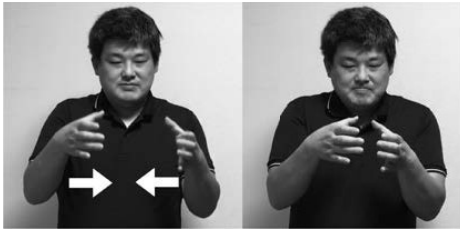


(9) (木の幹が) 太くなる or 太い



<sup>7</sup> 基準についてのより詳しい議論は鈴木 (1973: Ch.3) を参照。

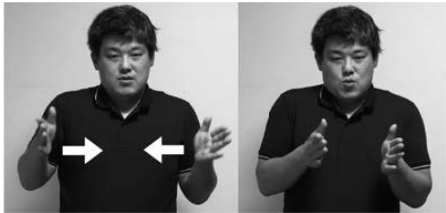
(10) (木の幹が) 細くなる or 細い



(11) 体が大きくなる or 体が大きい



(12) 痩せる or 痩せている



例えば、(11) は次の (13) の下線部に対応する<sup>8</sup>。(a) の下線部は「細い→太い」という変化を、(b) の下線部はクマにもともと備わっている属性を表しているが、そのいずれの意味も日本手話では (11) の形式を使って表せるというわけである<sup>9</sup>。

- (13) a. 私はもともと痩せていたが、筋トレを 2 ヶ月行った結果、体が大きくなった。  
b. あのクマは以前から体が大きい。

#### 4 個別性と普遍性の現れとしての換喩

日本手話の相対的属性に見られる換喩は、「日本手話固有の事情」と「言語一般の事情」とが相まって生じるものである。

日本手話固有の事情とは、日本手話が身体を媒体とすることである。手指などを使って表現をする日本手話では、その形式は必然的に目に見えることになる<sup>10</sup>。そのため、

<sup>8</sup> 以下のリンク先にある動画を参考にした。動画は 2022 年 6 月に確認。

<https://www.youtube.com/watch?v=k5DcvFSy7rk>

[https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das\\_id=D0005150296\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150296_00000)

<sup>9</sup> ただし、手の動かし方によってはここで言う多義性は生まれない。例えば、(11) を表現する際に、以下のリンク先にある動画の 1:37 のように手を段階的に動かすと、「徐々に体が大きくなる」という変化の意味にしかない。動画は 2022 年 6 月に確認。

<https://www.youtube.com/watch?v=k5DcvFSy7rk>

<sup>10</sup> もちろん、手指を用いれば必ず目に見えることにはならない (手拍子でコミュニケーションをすることも考えられる) が、日本手話 (ひいては手話) は視覚情報をもとに伝達を行う言語である。「必然的に目に見えることになる」とは、日本手話の形式として読み取られる限りにおいてのことである。

「背が伸びる」のような視覚的に知覚できる変化を表すことは容易である。見える変化を見る形式に素直に (i.e. 類像的に) 対応させればよい。これは、音声言語が擬音語を用いて音声を模倣することが容易であるのと同様である。問題は「背が高い」である。例えば、(5) の 2 枚目だけで「背が高い」を表そうとするとしてみよう。その場合、高い・低いといった評価を表すことはできず、「単にそのような高さである」と言っているにすぎなくなるだろう。高いという評価を表すためには、基準よりも上方に位置するというをなんらかの形で示さなければならない。

これを実現するため方法としてまず考えられるのは、「背が伸びる」とは全く関係のない恣意的な記号を作ることである。しかし、日本手話の実情はそうではない。なぜ日本手話は「背が伸びる」を表す形式を流用して「背が高い」を表すのだろうか。

ここで関わってくるのが言語一般の事情である。世界は様々な概念で溢れており、それらひとつひとつに異なる形式をあてがうことは不経済である (というより不可能である)。そこで、人間はしばしば、ことばの意味が関連しているならばそれらを一つの形式にまとめあげ、形式の数が無尽蔵に増えないようにする。このことについて、佐藤 (1992 [1978]) は次のように述べている。

私たちは、事態や心境を潔癖に適切に表現しようとするとき、既製のことばや意味の不じゅうぶんに当惑することが少なくない。従来の常識の体制からはみ出したものごとを言いあらわすには、ふつう、ふたとおりの方法がある。まったくの新語をこしらえるか、それとも、従来からあるものごとの名称を比喩的に流用するか、である。新語作製は容易だが、つくった新語が世間に通用するかどうかは疑問であり、また、無限の事態をまかなえるほどの無限のことばをこしらえつづけるというのは、記号論的に、ナンセンスでしかない。そこで、人類が古来たいていの場合に採用しつづけてきたのは、ことばの比喩的借用法である<sup>11</sup>。

佐藤 (1992 [1978]: 126)

(5) ~ (12) のような換喩は、このようなことを背景として生じたと考えられる。日本手話における換喩は言語の個別性と普遍性の現れなのである。

以上をまとめておこう。身体を媒体とする日本手話では、表 1 の右下の領域が空白になりやすい。このギャップを補充する手段として、視認可能な変化を表す形式をその変化の結果獲得される相対的属性を表すために換喩的に流用するのである。この流用は、人間の言語一般が行う比喩的借用法の一つである<sup>12</sup>。

<sup>11</sup> 同様の趣旨のことは、Scott-Phillips (2015: 5.1) が進化言語学の立場から論じている。

<sup>12</sup> 次の (ア) は「顔が綺麗である」という視認可能な相対的属性を表す形式であるが、これは「顔

表 1: ギャップの補充

	変化	相対的属性
日本語	背が伸びる	背が高い
日本手話	(5) →	

## 5 仮想変化表現と主体化

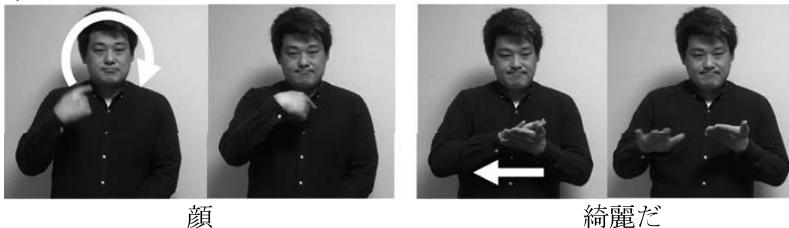
### 5.1 仮想変化表現としての換喩

ここまで、換喩が生じる条件を考察し、「視認可能な変化を表す形式は、その変化の結果獲得される相対的属性を表すために換喩的に流用される」という経験的な定式化を行った。この節ではここにおける換喩が一体どういうものなのかを考える。

背が低いという属性は通常、背が縮むという変化を経て獲得されるものではない。ということは、(6) で「背が低い」を表すときには、当の背丈はまるで背が縮むという変化を被ったかのように描写しているということになる。これは仮想変化表現 (fictive change expression) である。仮想変化表現とは、ある状態について、実際に変化が起こっ

が綺麗になる」という視認可能な変化を表す形式の流用ではない (そもそも、日本手話には「顔が綺麗になる」を表すコンパクトな形式は存在せず、「顔が以前と比べて綺麗である」などのように冗長に言わなければならない)。このことを理由に、本稿の主張が不十分であるという指摘がなされるかもしれない。

(ア) 顔が綺麗である



しかし、この指摘は的外れである。というのも、本稿の主張である「視認可能な変化を表す形式は、その変化の結果獲得される相対的属性を表すために換喩的に流用される」は、「視認可能な相対的属性を表す形式は、その属性を獲得するに至る変化を表す形式の流用である」を含まないからだ。上記の指摘が反例として機能するのは、後者の主張に対してである。

たしかに、仮に日本手話において「顔が綺麗になる」という意味を表すコンパクトな形式が存在するにもかかわらず、それが「顔が綺麗である」に流用されていないということが指摘されれば、本稿の主張はより厳密にしなければならないということになるだろう。その場合、より厳密な定式化は次の (イ) のようになるかもしれない。なぜなら、本稿に挙げた (5) ~ (12) の事例はいずれも、形状や位置といった「視野において対象が占める領域の拡大・縮小」を表すものであって、顔の綺麗さはそれには該当しないからだ。

(イ) 視野において対象が占める領域の拡大・縮小を表す形式は、その変化の結果として獲得される、対象の相対的属性を表すために換喩的に流用される。



たわけではないのにあたかも変化が起こったかのように描写する表現のことである (Matsumoto 1996, 野中 2019)。(6) はあたかも背が縮むという変化が起こったかのように描写しているという点で仮想変化表現なのである。

では、(8) で「髪が短い」という属性を表す場合も仮想変化表現と言えるだろうか。いや、すぐにはそうと言えないということに気づく。(8) は (i) ずっと髪が短いという状態も記述できれば、(ii) 髪は伸びただけけれども依然として短いという状態も記述できる。また、(iii) 髪を切った結果として現在短いという状態の記述も可能である。(i)(ii) では「長い→短い」という変化があたかも生じたかのように描写されているから、仮想変化表現と言えるだろう。それに対して、(iii) は「髪が短い」という状態を表しているとはいえ、その状態には「長い→短い」という実際の変化を経て至る。実際の変化が背後にある以上、(8)(iii) をすぐに仮想変化表現と断定することはできないだろう。(5) も考えてみよう。背が高いという属性は通常背が伸びた結果生じるものである。(5) で「背が高い」を表すとき、これは仮想変化表現なのだろうか。

この問題を考えるにあたっては、まず認知文法における主体化 (subjectification) という現象について述べておかなければならない。そこで、一旦問題の検討は棚に上げておき、以下しばらく主体化について概説する。

## 5.2 主体化とは何か

言語を用いて何かの描写をするとき、そこには「表現主体」と「表現対象」が存在する。観劇にたとえるなら、表現主体は観客 (見る人) であり、表現対象は役者 (見られる人) と言えよう。そして主体化とは、表現対象の側の要素が徐々に背景化し、それに伴い、表現主体の側の要素が顕在化する変化のことをいう (Langacker 1998)。例えば、次の (14)(a) と (14)(b) の *across* は主体化が起こる前と起こった後をそれぞれ表している。

(14) a. The child hurried across the busy street.

[その子供は混雑している通りを急いで渡った]

b. Last night there was an altercation right across the street.

[昨夜、通りの真向かいで激しい言い争いがあった] (Langacker 1998: 77)

(14)(a) には、表現対象側の要素としての「子供の物理的な移動」と、表現主体側の要素としての「その移動を追視するスキヤニング」がある。一方、(14)(b) には「物理的な移動」はなく、「言い争いが起こった位置を把握するためのスキヤニング」が存在するの

みである。(a) と (b) を比較すると、(b) では (a) に存在した表現対象の側の要素——物理的な移動——が消失し、それに伴い、表現主体の側の要素——スキャニング——が顕在化しているわけである。

変化現象である主体化は程度性を持つ (Langacker 1998: 76–77)。つまり、表現対象側の要素が完全に消失していない場合もあるということである。具体的な例で言えば、次の (15) がそれにあたる。(15) は物理的な移動の結果として至った位置を表している。物理的な移動が実際に行われているという意味で、表現対象の側の要素は完全には消えてはいないが、それでも (14)(a) と比べると物理的な移動は背景化している。それゆえ、(15) は (14)(a) と (14)(b) の中間段階にある主体化の例ということである。

(15) The child is safely across the street.

[その子供は通りを無事に渡って、向こう側にいる] (Langacker 1998: 77)

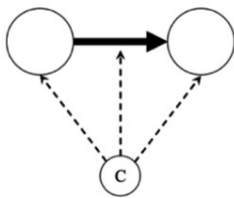
以上をまとめておこう。(14)(15) を主体化の程度順に並べて (16)(a)~(c) として再掲する。図 1 の C は表現主体 (conceptualizer) を表し、左側の円から伸びる太い矢印は子供の移動を表す。C から伸びる破線矢印はその移動をスキャニングする視線を表し、(a) から (c) にかけて太い矢印が破線になり消失していくのは実際の移動が希薄化していく過程を表す。

(16) a. The child hurried across the busy street.

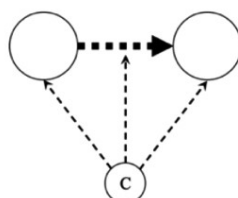
b. The child is safely across the street.

c. Last night there was an altercation right across the street.

(16a) 実際の移動



(16b) 移動の結果



(16c) 仮想上の移動

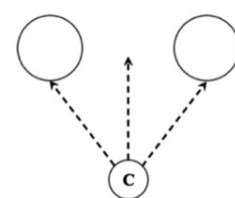


図 1: (16) における主体化の程度

日本手話の (5) ~ (12) も主体化の事例として認定することが可能である。(6) が「背が低い」に流用されるときには、表現対象の側の要素——実際の物理的な背丈の変化——が背景化することで、表現主体の側の要素——標準的な背丈から対象の背丈が位置す

る高さへと向かうスキヤニング——が顕在化していると言える。したがって、(6)「背が低い」は (16)(c) に対応する主体化の事例である。(5) が「背が高い」に流用される場合も、表現対象の側の要素が背景化しているのも主体化の事例であると言えるが、その背景化の程度は (6)「背が低い」ほどではない。なぜなら、背が高いという状態は「低い→高い」という実際の変化の結果至る状態だからである。したがって、(5)「背が高い」の主体化の程度は、実際の移動の結果を表す (16)(b) に相当すると言える。まとめると、次の図表のようになる。

表 2 主体化の程度性

	実際の変化の有無	主体化の程度
(5)「背が伸びる」	あり	ゼロ (16)(a)
(5)「背が高い」	あり	弱 (16)(b)
(6)「背が低い」	なし	強 (16)(c)

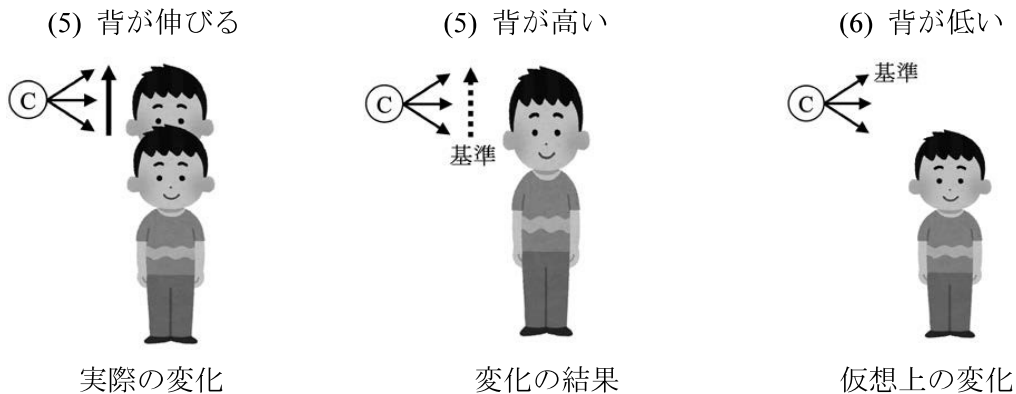


図 2: 主体化の程度とスキヤニング

### 5.3 プロトタイプ・カテゴリーとしての仮想変化表現

以上を念頭に置いて、棚上げしておいた問題の検討に戻ろう。上で提起したのは、(8)(iii) や (5)「背が高い」は仮想変化表現なのだろうかという問題であった。

表 2 を見ればわかるように、主体化の程度が最大ときは問題なく仮想変化表現と認定でき、逆に主体化の程度が最小のときは実際の変化表現となる。主体化の程度性と仮想変化性に対応しているわけである。ここで主体化の「程度」という以上は、最小の主体化から最大の主体化への移行にはグラデーションが見られるということである。ということは、主体化の程度と対応関係にある仮想変化性にもグラデーションが見られるということになる。仮想変化表現はプロトタイプ・カテゴリーを構成しているのである。

(6)「背が低い」は主体化の程度が最も高いため、仮想変化表現の典型例である。一方、

(8)(iii) や (5)「背が高い」は主体化の程度がそれよりも小さいため典型性は落ちるものの、周辺事例として仮想変化表現とみなしてもよい (実際の変化表現とみなしてもよい) という結論が得られる。

仮想変化表現がプロトタイプ・カテゴリーをなすという主張は当然と言えば当然かもしれないが、実は仮想変化表現の研究においてはあまりなされていない主張である。例えば、日本語の仮想変化表現を分析した Matsumoto (1996) は、日本語の「太っている」は「太る」という実際の変化が背後にあるため、仮想変化表現ではなく単純状態表現であると述べる。しかし本稿の分析が正しければ、日本語の「太っている」も、(5)「背が高い」と同じように、典型的ではない仮想変化表現として認定できる。ただし、最終的には日本語それ自体の分析を行わなければならないので、ここではあくまでも示唆に留める。

## 6 おわりに：認知言語学は日本手話研究にどう貢献するのか

本稿の考察は、様々な理論的示唆を含むものである。例えば、上で述べたように本稿は日本語の分析にも示唆を与えるものである。また、今回の記述は認知文法の主張をより強固なものにしうる。(16)(a)~(16)(c) の across の形式をいくら眺めても、実際の移動・実際の移動の結果・仮想上の移動に「共通する位置変化の存在」はわからない。結局は across の意味という不可視のものを頼ることでしか、「共通する位置変化の存在」を認定できないのである。しかし、日本手話の (5)~(12) の形式は主体化に関わるなんらかの変化を目に見える形で反映している。日本手話の換喩を分析することによって、主体化にまつわる議論の妥当性が高まるわけである<sup>13</sup>。

<sup>13</sup> 本稿の議論に対して、査読者から次のような指摘をいただいた。すなわち、本稿で扱った現象は、単に換喩であるのみならず、「Lakoff (1987: 440-) で述べられている end-point focus というイメージスキーマ変換」が「位置変化ではなく状態変化について起こったもの」とも考えられるのではないかと、との指摘である。

私も同意見である。そして、Langacker も十中八九そう考えている。主体化を扱った Langacker (1998) において彼は、(16a)(16c) のような across の例は *endpoint focus image-schema transformation* と呼ばれることもあり、これは認知文法で言うプロファイルの限定である、と述べている (Langacker 1998: 76)。ここで言うプロファイルの限定 (ないしはプロファイルのソフト) とはすなわち、彼の言う換喩である (Langacker 2008: 69)。

とは言っても、Lakoff の end-point focus と Langacker の主体化には、洞察の深さという点において決定的な違いがあることは述べておかねばならない。Lakoff は移動を表す語彙項目 (e.g. over) の複数の用法を比較し、そこに見られる差異を end-point focus で捉えた。しかし、end-point focus が生じる理由についてはほとんど触れていない。ここにはよくある経験としての end-point focus が存在するのだ (Lakoff 1987: 442)、と述べるにとどまっている (これはちょうど、ある表現について「これはかくかくしかじかという概念メタファーの事例である」と言うだけで記述を終えるようなものである)。

それに対して、Langacker (1987: 4.3) はそもそも移動とは何かというところから始め、同じ

他にも、日本手話の (5)~(12) と他言語の語彙項目との間に見られる多義構造の共通点が把握でき、日本手話を言語一般の文脈の中で眺めることが可能になる。英語は *across* という一つの形式で主体化の程度が異なる様々な意味を表す。これと同じように、日本手話も同じ形式で主体化の程度が異なる意味を表すことがわかる、ということである。決して日本手話だけが特別なシステムで動いているわけではない。

この「日本手話だけが特別ではない」という点を、手話研究の歴史を踏まえながらも少し掘り下げてみよう<sup>14</sup>。1960年以前は、自然言語としての手話の存在は認知されていなかった。手話は言語などではなくその場限りのジェスチャー（もしくは音声言語を手指で表示するために作られた人工言語）であると考えられていたわけである。この考えを誤解として退けるべく、1960年代の手話研究は手話と音声言語の共通点——言語記号の恣意性——を記述し、手話は音声言語と同様に言語であると主張した。様々な研究 (e.g. Stokoe 1960, Poizner et al. 1990) によって手話が自然言語として認識されるようになるると、手話と音声言語の共通点を強調する必要性は薄れていった。その結果、2000年代からの手話研究は（いわばそれまでの反動として）手話と音声言語の相違点を強く押し出すようになっている (Meir 2010)。例えば、木村・市田 (2014: 14) は次のように述べ、日本語 (母語話者) と日本手話 (母語話者) を鋭く対立させている。

日本のろう者が使っている手話 (日本手話 Japanese Sign Language) は、日本語とは異なる独自の体系を持つ言語です。独自の言語を話す集団としてのろう者は、独自の文化さえ持っています。

しかし、このような二分法は次のような危険性を孕んでいる。すなわち、手話と音声言語の相違点を過度に強調してしまうがために、両者の重要な共通点を見逃してしまう、もしくは共通点に気づいてもそれを無視するという危険性である<sup>15</sup>。この危険性を回避

---

語彙項目 (e.g. *across*) で異なる種類の移動が表せることを示し ((16) に挙げた用法以外にも例えば次の (i) を挙げている。(i) は *potential movement* を表す)、そしてこの移動の差異をスキヤニングという一般的な認知能力に訴えて説明した。認知言語学が一般的な認知能力の観点から言語現象に説明を与えようとする枠組みであること、そしてこのスキヤニングが仮想変化表現を分析するための道具立てでないことを考えた場合、この理論の志向により適った説明になっているのは Langacker の主体化であると言える。

(i) The Linguistics Hall of Fame is across the plaza, through the alley, and over the bridge.

[言語学の殿堂は広場を横切り、路地を抜け、橋を渡ったところにある]

(Langacker 1987: 170)

<sup>14</sup> 詳細については、例えば McBurney (2012) を参照。

<sup>15</sup> 1960年代に見られた、手話と音声言語の共通点を記述する段階において、手話に見られる類像性の存在を否定・無視する研究が多々あった (Taub 2012)。本稿がここで言いたいのは、「自らの議論に都合の悪いものは無視する」という姿勢が形を変えて再生産されかねない、という

するためには、手話と音声言語の共通点と相違点をバランスよく見ることを常に意識しなければならない。つまり、「中道に行く」という研究態度が今後の日本手話研究にとって必要であると思われる。日本手話だけを特権化してはならない<sup>16</sup>。

ところでこの「中道に行く」という態度は、認知言語学の「制約をもった多様性」(西村・野矢 2013: 26) として言語を捉えるという姿勢そのものである。認知言語学は意味構造は言語ごとによりかなり程度異なると考える一方で、その多様な意味構造を全ての人間が持つ一般的認知能力とのつながりのもとで記述する。つまり、言語ごとに異なる意味構造をあらゆる言語に適用可能な道具立てを用いて考察しようとするということだ<sup>17</sup>。こうすることで、言語には確かに多様性が見られるが、しかしそれは完全にランダムなわけではないということが把握できるわけである。本研究が、日本手話の世界に現在広く見られる「相違点偏重主義」を乗り越え、中道に行くための一助となれば幸いである。

## 参考文献

- 木村晴美・市田泰弘 (2014) 『改訂版 はじめての手話：初歩からやさしく学べる手話の本』 東京：生活書院。
- 酒井智宏 (2017) 「第 III 部 認知言語学」 畠山雄二 (編) 『理論言語学史』 115-165. 東京：開拓社。
- 坂田加代子・矢野一規・米内山明宏 (2008) 『驚きの手話「パ」「ポ」 翻訳：翻訳で変わる日本語と手話の関係』 大阪：星湖舎。
- 佐藤信夫 (1992 [1978]) 『レトリック感覚』 東京：講談社。
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 東京：岩波書店。

---

ことである。

<sup>16</sup> 最近では、手話が音声言語よりも優れているという主張も日本手話関係者のうちに散見されるようになってきている。例えば、「ろう教育の未来を考える会」のサイトに全日本ろうあ連盟参与の高田氏が次のようなことばを寄せている。サイトリンクは以下。サイトは2022年6月に確認。

<https://sites.google.com/view/the-future-of-deaf-education/Supporting-Organizations?authuser=0>

『手話は言語』という意味は、今後も音声言語と並び、**否、音声言語以上に世界の発展に貢献できる未来の言語**ということです。(強調は引用者による)

他にも、坂田ほか (2008: 113) は次のように述べる。

[線条性は] 口から同時に二つの言葉を発せられない、口が一つしかないことからくる**話し言葉のもつ限界**でもあります。これに対して、手話は、両手を使うことによって、同時に複数の事柄を表現することができます。(強調は引用者による)

<sup>17</sup> 本稿では、スキヤニングと参照点能力という、全ての人間が持つ一般的な認知能力を用いて日本手話を分析した。

- 坪井栄治郎 (2020) 「認知文法」坪井栄治郎・早瀬尚子『認知文法と構文文法』1–119. 東京：開拓社.
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編)『認知言語学 I: 事象構造』285–311. 東京：東京大学出版会.
- 西村義樹 (2018) 「認知言語学の文法研究」西村義樹 (編)『認知文法論 I』3–23. 東京：大修館書店.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013)『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』東京：中央公論新社.
- 野中大輔 (2019) 「英語の場所格交替と形容詞的受身：主体化と好まれる言い回しの観点から」『日本エドワード・サピア協会研究年報』33: 25–40.
- 野村益寛 (2009) 「認知文法」中島平三 (編)『言語学の領域 (I)』169–189. 東京：朝倉書店.
- 松田俊介 (to appear) 「日本手話研究はラベルを使用するべきではない」『東京大学言語学論集』.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar, vol. 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1998) On subjectification and grammaticization. In: Jean-Pierre Koenig (ed.) *Discourse and cognition: Bridging the gap*, 71–89. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
- McBurney, Susan (2012) History of sign languages and sign language linguistics. In: Roland Pfau, Markus Steinbach, and Bencie Woll (eds.) *Sign language: An international handbook*, 909–948. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Matsumoto, Yo (1996) Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In: Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds.) *Spaces, worlds, and grammar*, 124–156. Chicago: University of Chicago Press.
- Meir, Irit (2010) Iconicity and metaphor: Constraints on metaphorical extension of iconic forms. *Language* 86 (4): 865–896.
- Poizner, Howard, Klima Edward, and Ursula Bellugi (1990) *What the hands reveal about the brain*. Mass: The MIT Press.
- Scott-Phillips, Thom (2015) *Speaking our minds: Why human communication is different, and how language evolved to make it special*. New York: Palgrave MacMillan.

- Stokoe, William C. (1960) Sign Language Structure: An outline of the visual communication systems of the American deaf. *Studies in linguistics: Occasional papers*. Buffalo: University of Buffalo.
- Taub, Sarah F. (2012) Iconicity and metaphors. In: Roland Pfau, Markus Steinbach, and Bencie Woll (eds.) *Sign language: An international handbook*, 388–411. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Wilcox, Sherman (2007) Signed Languages. In: Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (eds.) *The Oxford handbook of cognitive linguistics*, 1113–1136. New York: Oxford University Press.



## The CHANGE FOR PROPERTY Metonymy in Japanese Sign Language

### Abstract

In Japanese Sign Language, a variety of expressions, which literally designate changes (e.g. growing taller), are also used to refer to properties (e.g. being tall). These expressions can be viewed as metonymic, in that they are based on the contiguity between changes and properties. This paper shows that this use of metonymy is motivated by the fact that Japanese Sign Language uses the visual-manual modality to convey meaning. It is further argued that *subjectification* (Langacker 1998) is a factor in these metonymic expressions.

Keywords: Japanese Sign Language, cognitive linguistics, fictive change expression, metonymy, subjectification

受領日 2022年4月25日  
受理日 2022年7月2日